

「どこでも精一杯」

成興寺 小倉道紀

皆さんは今どちらにお住まいでしょうか。田舎でしょうか、都市でしょうか。現在の日本では田舎と都市では暮らしがずいぶんと違ってしまっているように思います。

瑩山禅師のお言葉の中に、「山に逢っては、山に棲み、水に逢っては水に棲む、臥するには臥し、起きるには起きる」（信心銘拈提）というものがあります。このお言葉は、一人ひとりがそれぞれに置かれた場所そして置かれた状況の中で、自分自身の生を自分なりに最善のものにしようと精一杯努めることが大切だという意味です。それは田舎に住もうと都市に住もうと同じことです。

近年、日本社会は極端な少子化からくる人口減少社会になっています。特に田舎では人口（特に若年層人口）の減少が著しく、集落を維持するのが精一杯というところもあります。そのような地域に対して、人口の少ないところに限られた資源財源をつぎ込むことは無駄だから、人口をもっと都市部に集中させたらどうか、という論調で話される方も少なからずおられるように感じます。しかし、そのような論調の中には経済効率の視点だけしかなく、人間の生に対する深い洞察があるようには感じられません。瑩山禅師のお言葉にあるように、人間はどこであっても、自分が思い定めた場所で精一杯生きていこうとするものではないでしょうか。

私たちは、戦後の繁栄の中でもものの豊かさを享受してきましたが、いつのまにか自分たちがいつかは死ぬ存在であることを忘れ、楽しく生きることだけを求めるようになってしまいました。しかし、生きることだけしかない生き方は、自分だけしか存在しないと感じる生き方であり、その生き方が経済効率だけを求める生き方に繋がっていると思います。

山に逢っては山に棲み、都市に逢っては都市に棲み、いずれは死ぬけれども今は生かされているという自分の生を、毎日大切に生きる。そこには他者を振り回す心など入り込まないはずで、今この時代に自分の生き方を振り返ってみて、自分の生を精一杯生きている者同士が共に生きる。すなわち、田舎から都市への視線も都市から田舎へのそれも共に暖かいというような、そんな世の中にしていきたいものです。